

なぜ必要なのか？分娩舎の不断給餌とボールフィーダーの概念

アメリカでは 2007 年当時、雑誌で母豚の不断給餌が特集されていました。1990 年以降、急激に規模拡大に走るアメリカ養豚業界では、いつ農場訪問しても常にわずかな人員で管理していました。これは設備がよほど効率的に配置されているのか、養豚に適合した気候風土なのか、管理者の技術が卓越しているのか、と半ばあきらめたような感覚でとらえていました。実はこのころから、分娩舎の管理者による管理者都合の給餌では多数の子豚を抱える母豚に必要な栄養を補うことは難しいことが報告され始めました。日夜授乳するお母さんもそうであるように、毎日 24 時間授乳しなければならない母豚にとって、栄養不足は致命的な現象です。少なくとも管理者がいる時しか餌を食べることはできないのでどうしても無理して食べてしまいます。このギャップを解消するために考案されたものが母豚の不断給餌システムの概念でした（当初はパイプをつなげた非常に粗雑なもので、かなり散らかしていた印象があります(写真)＝設備の構造上、豚の生理にあっていないかもしれないが、気候が特殊な日本ならもっと使えないだろうという状態でした）。

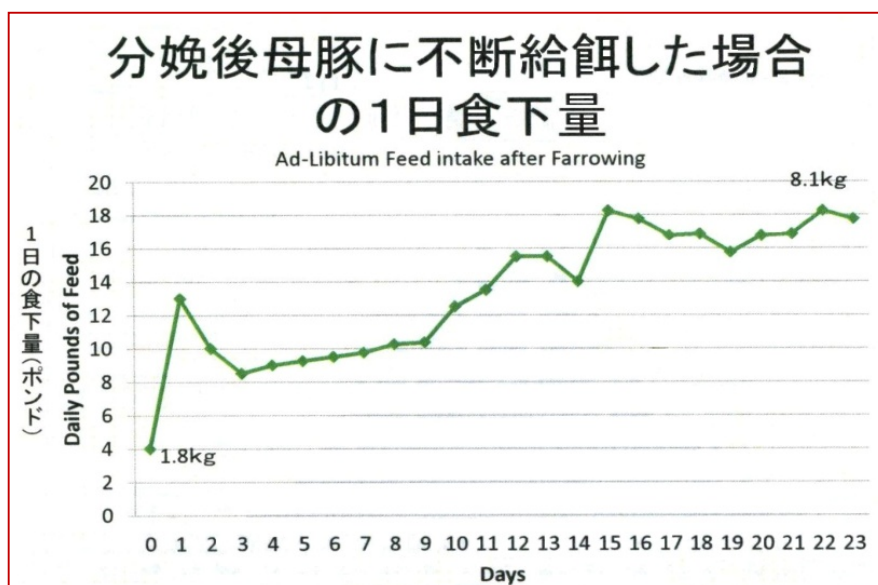


自家製の不断給餌パイプの方が既製品よりもはるかに多いと言われている。パイプはリングで固定されているが、餌の散らかしは結構目立つ(米国)

密閉度の高い、プラスチック製母豚給餌器が開発されているのを発見したのはそれから 5~6 年後の 2012 年、EU の研修で訪れたメーカーでした。その後 EU、アメリカ製なども試したものの最終的にこのスペイン製が優れていると判断しました。これが弊社のボールフィーダーです。すでに数社の類似製品が輸入されていましたが、ほとんどが定着していませんでした。簡単に農場に適合した使い方ができなければ単なるガラクタです。積極的なメンバー農場の取り組みのおかげで今では外部でも好評な優良商品にまで育てることができました。

今後は分娩柵の標準仕様になるはずだという強い確信を持って普及を目指しています。

右のグラフはある母豚への不断給餌時の実際の食下量を離乳までモニターしたものです。分娩後ずっと不断給餌にしてもあまり食べていないなど、飼養環境、育種の特徴でかなり違いがあります。体格の小さな豚では大型種のように食べることは



はできないでしょうし、なおさら不断給餌の仕組みがうってつけなのかもしれません。いちばん右の高いところが 8kg です。かれらの母豚がいかにか一度に食べるできないタイプかということです。最近が多産系のこうした育種も日本に多数入ってきて、時間さえ与えればしっかり食べるものの管理者の都合で致し方ないというのが現状のようです。その結果としてやせ過ぎて繁殖成績が乱れることは管理のミスではないことを認識してもらうのは大変なことなのです。分娩後、相当乳量も増す 10 日目くらいで 13 ポンド (約 6kg) を食べているようですが、その後も最大で 8.2kg だから、この程度であれば管理者の給餌で賄えるのではないかと思います。弊社グループの母豚はかなり大型なので分娩当初は馬鹿食いを起こして死亡する豚も散発するほどでした。そのため 7 日目くらいまでは上限を決めて慎重を期すことにしています。7~10 日目以降は全くの不断給餌に移行しているのがほとんどです。個体レベルでは一日 15kg 以上食べる豚もいるようですが翌日調整するなど母豚は想像していた以上に賢い動物です。いずれにしても繁殖成績の決め手になる分娩舎の母豚管理を管理者任せにしないで、設備面からも少し配慮することで、もっと有効な仕組みに変えられるということを実感していただきたいと思っています。